令和４年度　自己評価及び関係者評価

加古川市立氷丘南幼稚園

１　教育目標　『輝く笑顔　育ち合う仲間』　～豊かな体験と人との関りを通して～
２　目指す子供像　①健康で　明るい子　　②自分で考え　行動できる子　　③優しく　思いやりのある子　　④豊かに　表現できる子　　⑤根気強く　最後まで頑張りぬく子
３　評価基準　　Ａ：十分できた　　Ｂ：ほぼできた　　Ｃ：少し課題を残す　　Ｄ：不十分

評価項目	評価の観点	自己評価	◎成果　△課題　※改善の方策	関係者評価	
教育目標	幼児の発達段階や地域の実態に即し、幼稚園の特性を生かした内容であったか。	A	◎幼児の発達や興味に応じて、遊びの過程を大切に計画的な保育を展開できた。 △幼児の遊びの過程や姿から、ねらう個々の学びに応じた環境つくりにつながるように内面を読み取る力を高めていく必要性がある。 ※ひとつの遊びを幼児一人一人の視点でも内面理解が深められるように話し合う機会を増やす工夫をする。	・子ども達の笑顔から、園生活を楽しんでいることがよく分かる。 ・子ども達の興味や関心に応じた環境だったと思う。 ・明確な目標をしっかりもっていると感じた。 ・回数を重ねる毎に地域の方にも挨拶できるようになってきている。	A
	教職員の共通理解を図り、計画的・組織的に具現化が図られたか。	A			
	園舎、園庭が幼児にとって安全に主体的な遊びを展開できる環境であったか。	B			
保育活動	幼児の内面理解に努め、教師の関わりや援助は適切であったか。	B	◎幼児の発達や興味を読み取り、それに応じた保育や幼児が試しながら工夫できる時間の確保もできている。 ◎年長児と年少児が一緒の場で過ごしたり、お互いを見たり感じたりできる場の使い方の工夫がなされ、年少児は年長児に憧れをもち、年長児は年少児を思って行動する姿が一年を通して見られ、思いが伝わる関わり方が増えてきた。 ◎感染状況に応じて、臨機応変に個々の距離を確保したり、空き教室を使用したりして、様々な体験や行事を行うことができた。 △幼児の学びを保障するための環境の再構成につながるように一人一人に応じた支援を見極める力や内面を読み取る力を高めていきたい。 ※連続した学びにつながるように小学校との更なる連携を深め、学校の先生や児童とも交流する機会を増やすことに努める。	・明確な保育方針を出して、それにのっとって子ども達に接している様子が伺える。 ・様々な工夫をしながら、保育活動をしていると感じた。 ・感染状況に応じて、臨機応変に内容や開催方法の工夫が見られた。 ・コロナ渦でも小学校とのつながりを大切に、連携を図っている。次年度も続けてほしい。 ・異年齢児との交流の大切さがよく分かった。引き続き、お互いを意識できる環境つくりを願う。	A
	発達に必要な経験ができたり、主体的な遊びが展開できたりするような環境が構成されていたか。	B			
	幼児期にふさわしい生活が展開され、幼児一人一人の発達課題に即した育ちが保障されたか。	A			
	保育記録を活用し、日々の指導につなげることができたか。	A			
	自然体験や様々な人々との交流などを通して、豊かな感性や思いやり、社会性を培う心の教育ができているか。	A			
運営・組織	教職員一人一人が共通理解を図り、協力して教育活動に取り組むことができたか。	A	◎相談や共通理解することで、それぞれの立場や働き方に合わせつつ、各々できることは何かと考え、協力し合って取り組むことができた。 ◎消防士の協力も得ながら避難訓練をしたことで、違う視点からの学びがあり、防災知識とそれぞれ職員の意識が高まった。 △危機管理、特に防災に関して、少人数なうえに時間帯でメンバーが変わることもあり、様々な想定をした訓練を実施し、対応できる力を培うことが必要である。 ※職員が少ない分、保護者の方の協力がとても大きかった。引き続き、努力と工夫を忘れず取り組むことができるように職員間で話し合える時間の確保に努めたい。	・防災訓練や交通安全の指導など、取り組みが分かった。危機管理の意識を高め、子ども達、保護者、地域が安心し、安全に過ごすことができる園を目指してほしい。 ・先生達と保護者間の関わりを大事にしていると感じた。 ・園児数の減少を生かしながら、保護者と協力して子ども達を支えている様子が伺える。	A
	人間関係を大切にし、どんなことでも話し合えたり、自己を高め合ったりする職場の雰囲気づくりができているか。	A			
	教職員が互いにその努力を認め合い、励まし合うことのできる明るい職場づくりに努めているか。	A			
	クラスの目標は適切であったか。また、目標にせまるクラス経営ができたか。	B			
	安全や防災に関する組織を確立し、防災知識や危機管理の向上に努めたか。	A			
研修研究	積極的に園内外の研修に参加し、自らの資質向上に努めているか。	B	◎“幼児期の終わりまでに育ってほしい１０の姿”や“幼児教育において「育みたい資質・能力」の３つの柱”、“接続カリキュラム”などの方針を意識して、保育をするようになった。 ◎オンライン研修は複数で参加することができ、園の実態に応じてどうすればよいかという具体的な意見交換や共通理解になり、資質向上につながった。 ◎保育研修会では、大学教授の指導を受け、保育を見直す良い機会となった。 △引き続き、個々の困り感や内面を読み取り、個々に応じた支援を考え、試行錯誤しながら適した方法を見極める力を高める必要がある。	・熱心に研修など参加していると感じた。 ・忙しい中でも保育研修会等に参加し、園や個々のスキルを上げていこうと努力していることが分かる。 ・それぞれが研修したことも互いに共有し合っているところがよいと思う。 ・今の時代にあった働き方も念頭において、資質向上を目指してほしい。	A
	時代の流れや社会の状況の変化に対応した幼稚園教育のあり方、教育課題の把握に努め、解決に向けた取り組みができたか。	A			
	多様な障がいの状態に応じた指導内容や方法、教育的配慮ができるように専門性の向上に努めたか。	B			
	今なお残る差別の実態を直視し、課題を深く認識するなかで自らの問題として捉え、あらゆる生活の場で人権教育・啓発を推進しているか。	A			

			※文科省の情報や他府県の取り組みにも目を向けられる機会を増やす。		
行事	各行事の時期や内容は適切であったか。また、創意・工夫がされ幼児にとってふさわしい内容であったか。	A	◎一学期と二学期に発達段階を踏まえた音楽会を行ったことで、幼児の成長をより感じてもらうことができた。また、保護者や外部講師の参加で少ない園児数でも迫力や厚みを感じることができた。	・２回に分けての音楽会等、創意工夫がなされていて大変良かった。	A
家庭地域との連携	保護者の願いや期待を受けとめ、共通理解のもと連携して保育を進めてきたか。	A	◎“すくすくひょうごっ子”を活用したり、保護者と会話する機会に努めたりし、園児の成長をともに喜び合うことができる関係を築くことができた。 ◎園内外を問わず、園だよりやみなみっこなどで、園児の遊びの様子やそこから読み取れる学び、大切にしたい姿などを伝えた。 ◎ボランティアの協力を得て、多様なジャンルや英語の絵本の読み聞かせやコンサート等を教育活動に生かすことができた。 △地域の方には、コロナ渦で直接、園児の姿を見てもらうことができなかった。 ※地域のかたにも園児の育ちを見てもらえるようにゆとりある計画に努める。	・来園する機会は少なかったが、来園した際には、先生達と園児の笑顔が全てを語っていると思った。とても良い雰囲気だった。 ・園だよりやみなみっこだより等のお知らせで、子ども達の様子がよく分かった。 ・園での様子、良いことも課題点も含めて報告があり、どのような実態なのか、知ることができた。	A
	子育ての不安や悩みを受けとめ、積極的に子育て支援に努めたか。	A			
	地域の実情や保護者のニーズを踏まえ、子育て支援など「親と子の育ちの場」としての役割や機能が果たせたか。	B			
	地域の人々の積極的な協力を得たり、地域の施設や環境などを園の教育活動に生かしたりしたか。	B			
	園だよりや園通信、懇談等により園の目標や方針を知らせ、保護者と相互理解するとともに信頼関係を深めていくことに努めたか。	A			